

(1) 本年度のNIE活動の概要

NIE研究指定校1年目は、高学年(5、6年生)を中心に研究に取り組んできた。5、6年生の学習内容は身近な地域だけでなく、日本や地球全体の環境や人々の暮らし、歴史上の出来事などを学び、より広い世界へと目を向けていくことだ。児童が興味を持って学習に取り組めるように実際の様子を見たり、実物に触れたりすることもあるが、学習内容が児童の日常と離れて感じられてしまい、知識や技能の習得だけで終わってしまうこともある。

そこで、学習内容が児童にとって身近なものとして感じられるようにするため、また、児童が自分の問題として捉えられるようにするため、新聞記事を活用しながら授業を展開していきたいと考えた。

まず、新聞が児童にとって身近なものとして感じられようようにするために、廊下に新聞閲覧コーナーを設置、担任による学習内容にかかわる新聞記事の紹介、「新聞を読もうタイム」の設定などの取り組みを行った。また、新聞活用出前講座を3度実施し、新聞の読み方や構成を学ぶ機会を設けた。これらの取り組みから、児童の中で、新聞の面白さに気付いたり興味を持って新聞を読んだりする姿が増えた。また、授業で教師が提示した新聞記事を読むことを通して、自分の考えを広げたり深めたりする姿も見られた。

今後は、スクラップづくりに取り組んだり、学習したことを新聞記事にまとめたりする活動にも取り組み、NIEの活動を全校へと広げていきたい。

(2) 本年度のNIE活動の取り組み状況(4月時点)

1年目の本年度は、5年2組(30人)を中心に研究に取り組んできた。5年2組では、30家庭中15家庭で新聞を購読している。新聞を毎日読んでいるという児童もいるが、多くの子は、テレビ欄やスポーツ欄(プロ野球や甲子園の結果)、4コマ漫画を見る程度で、他の記事についてはほとんど読まないという状況であった。

全校では、各教科において、社会科見学のとまとめや調べ学習のとまとめを新聞形式で表したり、夏休みの課題として新聞づくりに取り組んだりすることを中心に行った。また、担任が気になった新聞記事を朝の会で紹介したり、授業の中で扱ったりすることも行っているが、これはあくまでも個人による取り組みであった。

(3) NIE活動のねらい

本年度のねらいを、学習内容が児童にとって身近なものとして感じられるようにすること、さらに、児童が学習内容を自分の問題として捉えられるようにするために、新聞記事を活用しながら授業を展開していくこととした。

そこで、次の2点について研究に取り組んだ。

①児童にとって新聞が身近な存在になるための取り組みのあり方

②児童が学習内容を身近な問題として捉えるための新聞記事の提示のあり方

(4) 5年2組を中心とした取り組み

①児童にとって新聞が身近な存在になるための取り組み

本校では毎日複数社の新聞をいただくことができた。そこで、毎朝届く新聞を次のように児童に提示した。

ア. 新聞閲覧コーナーの設置

教室の廊下に新聞閲覧コーナーを設け、子どもたちがそれぞれの新聞を広げて読めるようにした。

イ. 学習内容と関連のある記事の掲示

新聞記事の中から現在学習している各教科の内容と関連しているものを壁に掲示した。

ウ. 担任による新聞記事の紹介

担任が児童に紹介したい記事を選び、データベースを使ってプリントアウトし、児童と一緒に読んだ。記事を読んだ後、記事の内容について自分の感想や考えを書く活動を定期的に行った。

エ. 新聞活用出前授業の実施

信濃毎日新聞社読者センターの山岸さんによる出前授業を2回実施した。1回目の出前授業では新聞記事には、ニュースから天気予報、生活情報まで、日常生活に必要なあらゆる情報が載っていることを知った。また、それらを読者により分かりやすく伝えるための工夫がたくさんあることを学んだ。

2回目の出前授業では、「見出し」や「写真」だけでなく、「記事」まで読むことにどんなメリットがあるかを学んだ。記事の内容を知るために、「見出し」や「写真」から記事のおおまかな内容を捉えることができる。また、5W1H（いつ・どこで・だれが・何を・なぜ・どのように）が書かれているリード文も手掛かりになるが、本文まで読んで初めて明らかになることもたくさんあるということを、記事を読むことで実感することができた。具体的には、「中学生が市内の医療機関の職員や一人暮らしのお年寄りにお弁当やお菓子を送った」という内容のリード文の記事を扱う中で、本文まで読むとその活動にスーパーマーケットや飲食店、青年会議所など多くの人が協力していたことがわかった。このことから、記事まで読むことの大切さを学習することができた。

これらの取り組みによって、廊下で新聞を読む姿や、掲示された記事を立ち止まって見たりする姿などが見られるようになった。また、児童が新聞を広げた様子から、スポーツ欄が多く読まれていることや、3社の中でもS社の新聞がよく読まれていることがわかった。野球など、スポーツの習い事をしている児童が多いことや、地元の話題が掲載されていることが主なものであると考えられる。少しずつではあるが、新聞が児童にとって身近なものになりつつあることを感じた。



一方、野球シーズンが終わると開かれた形跡が全くない状態で新聞が置かれていたり、記事の内容について話題に上ることがほとんどなかったりする日も続いた。

新聞を読むことへの抵抗が少しずつ減ってきている一方で、野球以外の記事に新聞の魅力を感じていない児童や、記事の言葉が難しかったり、漢字が読めなかったりするため、読むのに苦労している児童がいることも事実である。児童の新聞を読むことへの抵抗感を少しでも軽減できるような工夫についても考えていきたい。

②児童が学習内容を身近な問題として捉えるための新聞記事の提示のあり方

授業の中で、学習内容に関連した記事を紹介することで、児童が興味を持って学習に取り組んだり、記事を読むことで視点を広げたりできるようにした。

ア. 5年社会「水産業のさかんな地域」

サンマやマグロの漁獲量についての記事を紹介することで、水産資源の減少を身近な問題として捉えられるようにした。

イ. 6年社会「国会のはたらき」

実際に行われる国会議員補欠選挙について、新聞記事の各候補者の主張を元に模擬投票を行った。

これらの取り組みの中で、今、世の中で起きていることが実際に自分たちの生活に関連していることに気付いたり、「自分だったら…」と自分のこととして考えたりする児童の姿が見られた。また、学習内容と関連のある記事を読んだことについて、教師に話に來たり、関連した記事を家で見つけて持って來たりする児童も見られるようになった。

(5) 公開授業の活動内容

【実践授業】 11月19日(金) 第3校時 5年2組(男子16人 女子15人 計31人)

1 単元名「これからの食料生産とわたしたち」(社会科)

2 単元の目標

日本の農業や水産業について学習したことや、日本の食料自給率が低いことなどから、日本の食料生産について、消費者や生産者の立場から課題を捉え、食料自給率を上げることが大切であることを理解し、そのために消費者である自分たちにできることを考えていくことができる。

3 単元の指導計画と新聞の活用

時	ねらい	主な学習活動	評価規準	提示する新聞記事
1	食料自給率のグラフや表などに着目し、日本の食料生産の課題を見出す。	農業や水産業の学習をふり返ったり、日本の食料生産の現状を調べたりして、学習問題をつくる。	〔思・判・表〕 日本の食料自給率にかかわる問いを見出している。	

2	食料自給率の低下の原因の一つが私たちの食生活の変化と大きくかかわっていることを知る。	資料をもとに、私たちの食生活の変化と食料自給率の低下の関係性を調べる。	〔知・技〕 食料自給率の低下が私たちの食生活の変化と大きくかかわっていることを理解している。	☆食品ロスについての新聞記事
3	食料を輸入に頼りすぎず、日本の食料自給率を上げていくことの必要性を理解する。	このまま自給率が下がっていくとどうなるのか、また多くの食料を輸入に頼り続けていくことの危うさについて考える。	〔知・技能〕 多くの食料を輸入に頼り続けていくことの危うさを感じ、食料自給率を上げていくことの大切さを理解している。	☆ガソリン価格の高騰などの新聞記事
4 本時	先進的な農業や、地産地消の取り組みを知り、日本の農業を支えていくために、生産者と消費者両方の取り組みが必要であることがわかる。【本時】	日本の農業を支えていくためにどのような取り組みがあるか考え、新聞記事から、先進的な農業や地産地消の取り組みについて感じたことを伝え合う。	〔思・判・表〕 日本の農業を支えていくためには、生産者と消費者の両者の取り組みが必要であることを理解している。	☆先進的な農業の取り組みについての新聞記事 ☆地産地消への取り組みについての新聞記事
5	食の安心・安全のために、トレーサビリティや検疫検査などの取り組みが行われていることを理解する。	食の安心・安全のための取り組みについて調べる。	〔知・技〕 食の安心・安全のための取り組みについて理解している。	

4 本時案

(1) 本時の主眼

日本の食料自給率が下がり、外国産の割合が増えていくことが問題だと感じている子どもたちが、みんなに買ってもらえる国産の物を増やすために生産者がどのような取り組みや工夫をしているのか考える場面で、先進的な農業や地産地消の取り組みについての新聞記事を読むことを通して、生産者が工夫や努力をしていることや自分たち消費者にもできることがあることに気づき、国産の物を増やすためには両者の取り組みが必要であることがわかる。

(2) 本時の位置（全6時間中第4時）

前時：このまま輸入品に頼っているとどうなってしまうのか考え、国産の割合を増やしていくことの必要性を理解した。

次時：生産者が安心・安全のために取り組んでいることを理解する。

(3) 指導上の留意点

新聞記事の大切な部分に線を引いてわかりやすくしたものを、クロームブックを活用して提示する。

(4) 本時の展開

段階	学習活動	予想される児童の反応	指導・支援 ・ 評価		
課題把握	問題をつかむ・見通しを持つ	1. 前時のふり返りから本時のめあてを考える。	<ul style="list-style-type: none"> 外国産の食品に頼りすぎていると、輸入できなくなったときに、食べたい物が食べられなくなる。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p style="text-align: center;">学習問題</p> <p>国産の物を増やすにはどうすればよいのだろうか</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> 畑や田んぼを増やせばいい。 農家を増やせばいい。 そんなに簡単に畑や農家を増やすことはできない。 生産者は何かやろうとしているのかな。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p style="text-align: center;">学習課題</p> <p>生産者はみんなに買ってもらえる国産の物を増やすためにどのような取り組みや工夫をしているのだろうか</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> 前時をふり返り、輸入品に頼りすぎていることが日本の食料生産の問題点であることを確認する。 「自分は子どもだから農業はできないけれど、できることはやりたい」という子どもの意見を紹介する。 国産の物をただつくるだけでなく、みんなに買ってもらえる物をつくることの重要さをおさえる。 	10
		2. 生産者は、みんなに買ってもらえる国産の物を増やすために、どのような取り組みや工夫をしているか考える。	<ul style="list-style-type: none"> 農家の人によりおいしい物をつくれれば、みんなが買ってくれると思う。 国産のよさは安全なことだから、それが伝わるように農家の人の名前や顔写真をパッケージに載せればいいと思う。 土地の気候や地形を活かして、めずらしい物をつくれればいいと思う。 機械を使って農家の仕事をもっと 	<ul style="list-style-type: none"> 既習事項をもとに、生産者の取り組みや工夫を予想する場面を設ける。 	25
追究	個人追究				

<p>追 究</p>	<p>共 同 追 究</p>		<p>楽にすればいいと思う。</p> <ul style="list-style-type: none"> 長野県の農家の人も工夫して国産の物を増やしていることがわかった。 これなら日本の食料自給率が少しでも上がっていくかもしれない。 <hr/> <ul style="list-style-type: none"> 消費者にもできることがあるとわかった。 国産の物を増やすには、消費者が国産の物を買うことが大切だと思った。 地元で売ると環境に優しいから地球温暖化が進まないし、消費者は新鮮な物を食べられるからいいと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの意見の中から、実際に行われている取り組みについて書かれた新聞記事を紹介する。 <hr/> <ul style="list-style-type: none"> 消費者側からの視点ももてるように、長野県の地産地消に関する新聞記事を提示し、わたしたち消費者にもできることがあると知る機会をつくる。 	
<p>一 般 化</p>	<p>ま と め</p>	<p>3. 本時のまとめをする。</p> <p>4. 本時のふり返りをする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 生産者がいろいろな工夫をしていることがわかった。 生産者と消費者それぞれができることをしたり協力したりすることが重要だとわかった。 <ul style="list-style-type: none"> 生産者も機械などを使って国産を増やそうとがんばっているから、自分もできることをしたい。 自分も買い物へ行ったときに、家の人に頼んで長野県産や上田市産の物を買ってもらうようにしたい。 自分も地元産の物のよさをいろいろな人に伝えていきたい。 自分も「あさつゆ」で地産地消を手伝いたい。 	<p style="text-align: center;">— 評価 —</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>国産の物を増やすには、生産者と消費者両者の取り組みが必要であることが理解できたか、ノートの記述や発言から評価する。</p> </div>	<p>10</p>

(6) 児童の反応

- ・食料に関する問題は、わたしたち消費者にはどうにもできないことだと思っていたけれど、今日の授業でわたしたち消費者にもできることはあると知った。
- ・わたしは消費者だからできることはあまりないと思っていたけれど、消費者もできることがあることを知れてよかった。自分も協力できることはして、国産のものを増やしたいと思った。
- ・生産者も消費者もみんないろいろな取り組みや工夫をしているんだなと思った。
- ・長野県でも食料自給率を上げる取り組みがされていることがわかった。
- ・今日の授業で、生産者も消費者もそれぞれできる工夫をしていることがわかり、こういうことをもっと日本中のみんなで協力すれば食料自給率を上げて国産の物を増やせると思った。

〈授業のふり返り〉

前時までには、子どもたちは日本の食料自給率について学び、日本が年々輸入品に頼るようになっていくことに危機感を持っていた。さらに、このまま輸入品に頼っていると日本の食料自給率は下がり続け、今までのような食生活ができなくなってしまうことは理解できたようだった。しかし、生産者はそもそも高齢化や労働力不足、日本の耕地面積の少なさなどの問題を抱えており、それを打開していく必要があることになかなか視点が向かなかった。また、何かできたとしても「生産者がどうにかするしかない」とどこか他人事であった。そこで、県内で生産者と消費者、それぞれが国産の物を増やすための工夫をしているという内容の新聞の記事を扱った。県内の取り組みから、子どもたちは自分の身近なところで様々な取り組みがなされていることを知ることができた。また、消費者の取り組みの記事は小学生が地産地消を促進するためにボランティアをしている内容だったので、子どもたちの意識が自分事になっていく様子が見られた。授業後の研究会で、NIEの先生方から「新聞は社会で起きていることの縮図である」というお話があったが、今回2つの新聞記事を活用したことで、教科書で学んでいることと現実を結びつけることができた。今後も新聞記事を効果的に活用していきたい。

(7) 成果と課題

〈成果〉

- ・日頃から、新聞記事に触れる活動に取り組んできたり、新聞活用出前講座に取り組んできたりしたことから、児童が興味を持って新聞記事を読めるようになってきた。
- ・授業で学習問題に関連した新聞記事を提示することで、児童が学習内容について多角的に考えることにつながった。
- ・新聞記事をそのまま提示するのではなく、必要な部分を切り抜いたり、児童に紹介したい部分に線を引く、クロームブックで提示したりすることで、児童に新聞記事の内容を捉えやすくさせることができた。
- ・新聞記事から考えたことを元に、実際に校外に出て見学や調べ学習に行くなど、学習内容を発展させていくことができた。

〈課題〉

- ・ 児童が自ら継続して新聞を読んでいけるような工夫や取り組みが必要である。
- ・ 新聞記事の言葉が難しかったり、漢字が読めなかったりして、記事を読むのに苦労している児童の姿も見られる。クロームブックや辞書などを活用しながら、よりスムーズに新聞記事が読めるような取り組みを考える必要がある。
- ・ 今学習していることに合った、タイムリーな記事を見つけることが難しい。データベースの検索の仕方をさらに工夫したり、どの授業場面でどんな新聞記事が使えるのか、実践したことを蓄積し、情報交換したりする機会を設けていきたい。
- ・ 本年度は、主に学習内容に合った記事を教師が児童に提示するという形の授業の取り組みであった。今後は、児童が自分で課題にあった新聞記事を見つけ、記事から学んでいけるようにしたい。

〈次年度の方向〉

- ・ 児童が継続して新聞記事を読んでいけるようにするために、一人一人がテーマを決めてスクラップブックづくりに取り組んでいく。
- ・ 学習したことや体験したこと、調べたことを新聞にまとめる活動を取り入れていく。
- ・ 各学年、各教科における新聞活用をまとめた新聞活用カリキュラムを作成していく。
- ・ 新聞記事から学んだことや考えたことを実際に確かめたり、実践したりして自分たちの生活につなげていく。

これらのことを全校で取り組んでいきたい。